

現代の“ムカつき” “キレル” 中学生の心理

大石 英 史

The Psychological Consideration on the Mentality of Contemporary Junior High School Students Who Have a Tendency of *Mukatsuku* (You make me angry) and *Kireru* (You've tried my patience to the limit)

Eiji OHISHI

1. 問題と目的

近年、少年による犯罪の凶悪化およびその行為に対する罪意識の希薄化が叫ばれるようになってきている。平成9年5月、神戸市須磨区における小学生殺害事件の容疑者が14歳の男子中学生であったと報道されたとき、少年犯罪がある一線を越えたという感を抱いたのは筆者だけではなかろう。この事件があたかも口火を切る形となり、翌年1月より、中学生のナイフを使った事件が相次いだ。平成10年1月から3月までの間だけでも次の様な事件が続発している。

- ・ 1月8日、川崎市の中学生在が受験のことをめぐり口論となり母親を刺殺。
- ・ 1月28日、栃木県黒磯市で13歳の男子中学生が女性教諭をナイフで刺殺。この事件に関しては、行為そのものの残忍さ以上に「普通の子が突然キレル」ことの恐さが強調された。
- ・ 2月2日、東京都江東区亀戸で中学3年生が警察官を襲い拳銃を奪おうとする事件。
- ・ 3月5日、広島市で中学生グループが会社員を暴行殺人。
- ・ 3月9日、埼玉県東松山市で中学1年生が同級生殺傷。この事件は、小学校時代いじめによって支配していたグループから逆に支配されそうになり、刺殺されたのは新たに支配しようとしたいじめっ子の中の一人であったという。

その後さらに、神戸での郵便局襲撃事件、千葉県四街道市で中学生が同級生の父親を殴り殺す事件などが続いている。

これらの事件に共通するのは、子どもたちの攻撃の刃は、特定の他人に向けられてはいるが、本当に殺害したかったのはその人というよりもその人の向こうにある何か、あるいは本当は誰でもよかったと言えそうな何か漠然とした対象へと向けられているように思われる。すなわち、何にムカついているのか、その理由が子ども自身にもよくわからないというのが、現代の少年犯罪の特徴である。

また、これら一連の事件と連動するかのようになり、「ムカつく」「キレル」(注1)を理由とした学校での「新しい荒れ」の問題が、にわかには社会現象として表面化してきた。少年非行の件数の増加や凶悪化は、非行の第4の波とも言われているし、小学校においては、教師が少数の生徒の対応に追われて授業が成立しなくなる「学級崩壊」と呼ばれる新たな

問題が、社会的にも認知されはじめています。

このような状況を受けて、文部省は、平成7年より試験的に導入されたスクールカウンセラー制度をさらに拡充していくとともに、平成10年9月より4学級以上の規模を持つすべての中学校に「心の教室」相談員が派遣されることになった。また、文部省の諮問機関である中央教育審議会では、はじめて幼児期からの家庭教育の重要性について触れ、過保護の緩和、夫婦連合の強化、父親の子育てへの参加など、かなり踏み込んだ提言を行っている。これに関する行政面での施策として、平成10年度より、家庭教育相談カウンセラーが各県に2名配置されることにもなった。ただし、大人たちによるこのような施策が、今の子どもたちの状況を本当に改善し得るのかどうかについての問題は、依然として残されたままである。

本論文では、平成10年に、山口県内で中学生の不満や怒りを直接聞いてみようとの趣旨で開かれた2つのイベント——国立山口徳地少年自然の家において開かれた「緊急ミーティング 言いたいことをぶちまけよう！」および長門市の青少年育成大会における「中学生と親のフォーラム」——において表明された中学生の日頃のムカつきやキレることに関する体験報告について紹介し、それらを素材に、最近の中学生の心理的傾向、特に彼らがどういうときにムカつき、またキレるのかについて分析するとともに、今の彼らにとって最も身近な大人である教師と親に対するムカつきが何によって引き起こされるのかについて考察する。これらを通して、現代の子どもたちが置かれている心理的状况およびそれに対してわれわれ大人にできることは何かに関する示唆を得ることが、本論文の目的である。

2. 中学生の声

(1) 緊急ミーティング

・日時：平成10年3月29日（日）19:00～21:00

・場所：国立山口徳地少年自然の家

・参加者：県内11の中学校から生徒72名（男子37名、女子35名）

・グループ構成：中学生7～9名、ボランティアサークルの大学生2～4名、教員、保護者若干名、ファシリテーター（メンバー同士の対話を促進する者）1名からなる10数名のグループが6つ作られ、それぞれのグループが車座になって話し合いを行った。

なお、その中の一つのグループのファシリテーターであった筆者は、中学生たちの内面を引き出すための呼び水的な質問として、次のような大きな3つの観点からの質問をあらかじめ用意した。

- ・キレる体験について…最近キレたことがあるか？ どんなときキレたか？ キレてみてどうだったか？ キレる前にどうして言葉で言えなかったのか？ ストレスを日頃どうやって発散しているか？
- ・今の学校について…今の先生たちに言いたいことは？ これから学校はどうなってほしいか？
- ・自分の親について…どんな親であってほしいか？

以下は、筆者のグループで行われた中学生たちとのやりとりをQ&Aの形で列挙したものである。なお、他のグループの生徒が発言した言葉も聴取した範囲で載せておく。

Q 1. 最近キレたことある？ どんときキレた？ キレてみてどうだった？

A.

- ・集団で馬鹿にされたとき、友だちと取っ組み合いのケンカになった。
- ・先生に対して、キレた。生徒会のあいさつ運動をしていて先生に笑われたので、殴りかかった。その後、先生が認めてくれるようになった。キレてよかった。
- ・先生から悪いことをしていないのに悪いことをしたと一方的に決めつけられた。
- ・自分はこれで精一杯なのに、できないと文句を言われた。
- ・頑張ってたときに、「まぐれだ」と言われた。
- ・自分がやろうとしていることを奪われたとき。
- ・他の子のことをあからさまにひいきしたとき。
- ・押しつけ、やらされるだけの勉強や作業ばかりさせられたとき。
- ・日頃のストレスがだんだんたまっていって、ついにキレル。その手前手前で発散できていない。心の逃げ場がない。気軽に相談できる人がいない。そのはげ口のようにいじめが起これるのではないか。
- ・キレルにも2通りあるのではないか。突然キレルのと、だんだんたまっていって最後にキレルのと。
- ・いばる先輩たちにキレて、友だちと二人でバレーボールを投げつけてやった。(他グループの中学生)
- ・普通であるようにいつも我慢してきたので、キレたのではないか。(他グループの中学生)
- ・大人が思っているほど強い意味はない。一種の流行で、この言葉を言うとストレス発散になる。(他グループの中学生)
- ・新聞とかに影響されてやってしまったのではないか。(他グループの中学生)
- ・人を刺すことの意味がわからなくなっている人が出てきた。(他グループの中学生)

Q 2. キレル前にどうして言葉で言えないの？

A.

- ・先生も忙しそう。生徒にもあまり期待してないんじゃないか。
- ・内申書のこと気がなって、言いたいことが言えない(内申書のこと気がなるから、部活をやめられない)。
- ・親に相談したら、「そんなことは自分で考えなさい」と言われた。
- ・友達には相談したら迷惑じゃないかと思う。自分と同じ気持ちの友達となら話せるが、そうじゃないと話せない。みんな本当は浅い付き合いなんじゃないか。自分は聞き手に回るタイプだし。

Q 3. じゃあ、日頃どうやって発散してる？

A.

- ・部室でみんなで歌を歌って発散する。
- ・休日思いっきり遊ぶ。
- ・部活で気をまぎらわす。
- ・趣味、好きなことに耽る。

・発散場所がない。(他グループの中学生)

Q 4. 今の先生たちに言いたいことは？

A.

- ・先生たちは冷めている。
- ・信頼関係ができない、先生たちははじめから疑ってかかる(掃除中、落とし物を見つけて届けようとしたら、掃除さぼるなど言われた)。信じてくれていない。
- ・先入観で見ている、マスコミの報道とかを鵜呑みにしているように思う。
- ・機嫌によって態度が変わる、機嫌が悪いと生徒に当たる。
- ・ちゃんと叱ってくれない、見て見ぬふりをしている。

Q 5. これから学校はどうなってほしいか？

A.

- ・もっと認めてほしい。
- ・お互いが自己主張できる関係がほしい。
- ・意味もない校則はやめてもらいたい(ルーズソックスの禁止、スカートや髪の長さのチェックなど)。これらは個性をつぶしている。ただし、けじめは要る。そのときこそ、ちゃんと叱ってもらいたい。
- ・自分たちで作っていける学校にしてほしい。
- ・学校内で話し合える時間を作ってほしい。(他グループの中学生)
- ・生徒からの要望があっても結局先生たちの会議で決まってしまう。(他グループの中学生)
- ・先生の権力が強くて抗議できない。(他グループの中学生)
- ・勉強を減らして将来役に立つことを教えてほしい。(他グループの中学生)
- ・叩かないとわからないから叩くという先生がいる。でもスリッパは使わないでほしい。もっと言葉で伝えてほしい。(他グループの中学生)
- ・部活で自分たちは水も飲めないのに、先生は職員室でコーヒーを飲んでいる。(他グループの中学生)

Q 6. どんな親であってほしいか？

A.

- ・期待されないのも期待され過ぎるのもいや。適度に期待してほしい。
- ・家庭が自分の疲れを癒してくれる場所であってほしい。
- ・期待に沿えなかったときに、大げさにため息をつかないでほしい。
- ・うちの親は勉強のことばかり言わないのがいい。
- ・勉強や学校のことをあまりしつこく聞いてほしくない。
- ・束縛するのはやめてほしい。
- ・大事な友だちを外見だけで判断しないでほしい(茶髪の友人のこと)。

(2) 中学生と親のフォーラム

日時：平成10年8月8日 13:50～15:00

場所：長門市中央公民館

参加者：市内の中学生、保護者、教育関係者等

このフォーラムでは、中学生と保護者がステージに上がり、お互いの言い分を出し合った。まず、中学生たちが一人ずつ大人特に親に対して日頃感じているムカつき、あるいは実際にムカついた体験について語り、次に、それぞれの発言に対して保護者たちが親の立場あるいは一人の大人の立場から返答を行うという形で進められた。具体的には、長門市の中学3年生の男女それぞれ4名ずつの計8名と母親父親それぞれ2名ずつの計4名がステージに上がり討論を行った。ただし、保護者は、実際の親ではない。なお、筆者はこのフォーラムにコーディネーターとして参加した。以下は、生徒の発言の主なものを抜粋したものである。

A男：公園や観光地におけるゴミのポイ捨てなど、子どもに注意したことを親自身が守っていない。親がよきモデルになるべきではないでしょうか。

B男：もうすぐ受験という大きな壁に立ち向かいます。学校生活も授業、部活、生徒会活動など多忙であり、疲れることも多い。そんなときは家庭学習にも身が入らない。すると親はすぐに受験のことで口うるさく言うてくる。ほくのことを思っていることであっても、何回も言われるとムカついてくる。自分自身のことなので自分なりに真剣に考え、悩みもしています。親の言葉によって余計にストレスが溜ります。親から見れば何も考えていないように見えるかもしれませんが、進路のことは自分でいろんな高校のことを調べ、受験の難しさなどを先輩から聞いて心の準備もしています。だからそのあたりを理解して見守ることもしてほしいし、口を開けば「勉強、勉強、受験、受験」とオウムのようなひとつ覚えの繰り返しの言葉はやめてもらいたい。

C子：私たち中学生にはムカつくことが毎日のようにあります。私たちだけでなく、小学生にも高校生にもたぶん私たちの親にだってあると思います。親や先生がいちいちうるさいとか、受験のためのストレスが溜っていたり、部活動で先生やコーチの言うことにムカついたり、ささいなことなのですが、私たちはそんな小さなことにもイライラしてしまうのです。私の父母は生活のことで口うるさく注意をします。「早く風呂に入りなさい」とか「早く寝なさい」とか、遊びに行くときには「早く帰って来なさい」とか「ちゃんと部屋を掃除しなさい」とか、そんなことばかり毎日毎日言われています。私は疲れているのでのんびりしたいのに、そんなときに「早く早く」と指示されると、すぐムカついてきます。父母がこんな注意をするのは、私のためだとは分かっているつもりですが…。それならもっと私の気持ちだって考えてほしいのです。

D子：テストの前だったので、私は勉強をしていたのです。気分転換にと思ってお茶を飲んでいました。すると母が、「あんたがこうしてお茶を飲んでいる間にも他の人は勉強しているのよ。さあ、早く勉強しなさい」と言いました。私はその言葉を聞いたときどうしてそんなことを言われたのか理解できませんでした。私は今まで母や学校や塾で「勉強は将来社会に出て生活するため、役に立つ人になるためにするものだ」と教えられてきました。いい順位を取ることはほとんど意識したことがありませんでした。テストでも周りと

比べてどうだったかというよりは、どれだけ自分が理解できているかということを中心に考え勉強してきました。それなのにあの言葉は、私には「周りの人よりいい順位を取りなさい」と言っているように聞こえました。順位はあくまでも結果を表す一つの方法です。自分が将来したいこと、なりたいものを決め、それを実現するために自分でやる気を起こし毎日頑張っていくことが本当ではないでしょうか。……今度から何か言う前に少しでもいいから私たちのやる気を待っていてほしいと思います。やりたくないときは、それなりの理由があったりするのです。

E子：大人は「正しい」とか「間違っている」とか、いったいどこで判断しているのでしょうか。日常生活の中で、正しい、間違っているという言葉をよく耳にしますが、私にはその判断基準がよくわかりません。正しいとされていることがなぜ正しいのか十分に納得できないこともあり、大人の一方的な価値の押しつけにひっかかるところがあります。例えば、進路のことや中高校生の凶悪犯罪などの話題で、大人はわかったような顔をして自分の意見や分析結果を押しつけてくる。私たちが今本当にほしいのは、そういった主観的な他人の意見や分析ではなく自分自身の考えです。その考えをきちんと聞いて支えてくれる大人です。こんなことは身勝手な中学生の言い分かもしれませんが、大人の価値観の押しつけではなく、子どもの価値観をしっかり受け止めてくれる大人がほしいのです。

3. 現代中学生の心理分析

(1) ムカつき、キレル中学生の心理

① 「緊急ミーティング」の声から

緊急ミーティングにおいて語られた生徒たちの声の中で、最も意外に思えたのは、実際にキレたことのある生徒にキレてみての感想を尋ねてみると、「よかった」と答えた者が多かったことである。つまり、キレることで関係がさらに深まったと感じている生徒がかなりいたわけである。もちろん、キレた後のお互いのフォロー次第で関係はよくも悪くもなるのであるが、それを考えている間はそもそもキレることができない。ここには、瞬間反射的になり、キレないと自分の内面のわだかまりを表明できないという今の中学生の特徴が見て取れる。

大原(1995)も指摘する通り、今の若者たちは概して「やさしい」と言われる。そして、そのやさしさは従来のもそれとは質が異なり、カッコ付きで用いなければならない。それは、例えば、ある生徒の「友達には相談したら迷惑じゃないかと思う。自分と同じ気持ちの友達となら話せるが、そうじゃないと話せない」という発言に端的に現れている。彼らは、相手が自分を攻撃してこないことを確かめてからでないと自分の内面を表明することができない。あるいは自分が否を唱えることで相手を傷つけることをひどく恐れているように見える。そして、たとえ親友であっても距離を置いていて、相手の世界に入り込むことを嫌う。それは、一面では、自分が傷つかないようにしているだけであり、本心はひどく利己的で冷酷な面を持ち合わせていることを意味する。しかし、彼らが「やさしい」のは、単に自分が傷つくのが怖いからではなく、従来のもやさしさの中にあつたある種の強引さや押し売りの要素にまで気が回るようになったからではないか。そして、彼らが大人たちに向かって自己主張しなくなったのは、大人が話せる存在ではないことを雰囲気を感じ取っ

ているからである。その意味で、今の子どもたちは大人たちに対しても「やさしく」なったと言えるのではないか。つまり、その「やさしさ」に耐え切れなくなった子どもたちが、一気にキレル形で自己を表出する。しかし、表面「やさしく」はあっても、本音では、自分のことを認めてくれる大人、あるいは考え方や感じ方は違ってもそれを認め合える関係を待ち望んでいることに変わりはなく、そのことの無理解を越えて大人たちが正論を一方的に押しつけてくるとき、子どもたちはムカつきキレルのではないだろうか。

別のある生徒の「キレルのも2通りあるんじゃないか」という言葉は、キレル体験をよく説明している。この言葉を筆者なりに解説し直すと、ストレスが徐々に溜って行き、ついにコップの水が溢れるが如くにキレルのが「アナログ」的キレ方だとすると、そのような文脈とはあたかも無関係に理由なく突然キレルのが「デジタル」的キレ方である。黒磯北中の女性教師刺殺事件におけるマスコミの「普通の子」がキレルという取り上げ方は、現代若者のデジタル的感性（その脈絡のなさ）のことを言っている。しかし、その生徒は事件前に保健室に頻繁に通っていたが、そのことの心理的背景を理解されることなしに教室に戻られ、しかも授業に遅れたことをしつこく叱責されたという経緯がある。それを思えば、事件を起こしたその生徒の内面は長い時間をかけて少しずつ「アナログ」的に荒んでいたであろうことが推察される。また、その女性教師との日頃の人間的な交流があったならば、遅刻したことを問い詰められたとしても、ナイフを持ち出すことはなかったのではないか。教師集団による指導が人間的な潤いをなくし義務や強制の色合いを濃くしたとき、このような悲劇が起こる。生徒と教師の日頃の何げないかわりが切れていたことが、あのような凄惨な事件を引き起こしたとすることができる。生徒は自ら放つSOSのサインに誰からも気づいてもらえず、他方、若手の女性教師は自分が教師であることの使命感で自らを追い立て、本当は生徒も教師も傷ついていたのではないだろうか。

しかし、緊急ミーティングで生徒が語ってくれた和解の一手段としてのキレルとキレてナイフで刺すようなキレルとが厳密に区別し得るものなのか、あるいは相手とつながりたいためにキレルことの延長上に歯止めが効かなくなり殺害にまで至ることがあるのかについては慎重な考察が必要である。なぜならば、キレたときに当の個人の中で作動する理性の歯止めは、その相手や他者一般との日頃のかかわりの中で得られている安心感や信頼感とキレル引き金となった事柄やそのときの状況性によって決定されるからである。そして、日頃の対人関係の中で得られる安心感や信頼感は、他人に対してどの程度自分を出しているか（それは自分を出しても安全な人間関係の環境を体験することと相互に関連しているのだが）によって保証されつつ育まれる。このように、相手の命にかかわるようなキレ方をするかどうかは、その子の日頃の対人関係の持ち方とキレル前後の状況という少なくとも2つの変数の掛け合わせの観点から考えていかなければならない。ただし、前者にかかわる今の子どもたちの対人関係の持ち方は、先に「やさしさ」として指摘したように、その表面的な明るさとは裏腹に、お互い気を遣い合い相手の世界に入り込むことを避けようとする傾向を強くしている。もちろん、これは時代の変化、特に豊かさや便利さによって物理的にも心理的にも「個室化」してきたわれわれの生活スタイルを反映したものである。このような対人関係の「表層化」は、後者の変数にも影響し、実際にキレたとき、従来見られたように他者の視線や集団性に煽られて引っ込みがつかなくなっていくのとは異なり、自分が自分を煽っていくという新しい衝動の増幅回路を作り出す可能性がある。ともあれ、キレてよかったと答えた者は、日頃から他人に対してほどほどに自分を表現し、人とのほ

どほどの人間的つながりが体験できており、かつ自分が追い込まれた状況が理性の歯止めを失うほどのものではなかったということは言えるだろう。

さらに、日頃のストレス発散の方法に関する問いについては、「歌を歌って発散する」「休日思いっきり遊ぶ」「部活で気をまぎらわす」「趣味、好きなことに耽る」などが挙げられているが、実際今の中学生の生活時間は効率優先のハードスケジュールで占められている。このこと自体が、子どもたちの「逃げ場」のない状況を作り出している。しかし考えてみれば、効率優先のスケジュールの中でせわしなく動き回っているのは、子どもたちだけではなくわれわれ大人も同じである。疲れた大人が疲れた子どもに何をしてやれるというのだろうか。人生について深く考え、深く味わう時間がある程度保証できる社会システムの裏打ちがないと、現代人のストレスに対する対策はいつも対症療法的なもので終わる他ない。このような現状の中で可能なことは、とりあえずストレスとどううまく付き合っていくかという視点であろう。例えば、ストレスを日常の人間関係の中で「小出し」にしていくようなコミュニケーション・スキルを身につけていくこと、また直接攻撃を避け、別の場所で別の相手に吐き出す（愚痴をこぼす、弱音を吐く）というやり方もあるだろう。もちろん、生きていくことの違和感を社会的に認められる形の表現にまで高めていく昇華という適応機制もあるだろう。今回の緊急ミーティングが、一人一人が日頃疑問に感じていることを、ある程度安心して言葉にし合うことに成功していれば、これも一つのコミュニケーション・スキルのトレーニングになり得る。

② 「中学生と親のフォーラム」の声から

親と子のフォーラムでは、生徒が受験を半年後に控えた3学年ということもあってか、親が勉強をすることや成績を上げることへのプレッシャーを子どもたちに一方的に浴びせ続けている様子が見えがえる。高校進学について先輩に話を聞くなど、自分の将来のことについてとても真剣に考えているにもかかわらず、「口を開けば、勉強、勉強、受験、受験とオウムのように」に繰り返され余計にストレスが溜ってくるB男。疲れ切って家に戻ると、今度は生活のことで「早く～しなさい」と「ちゃんと～しなさい」と口うるさく注意してくる両親にだんだんムカついてくるC子。そして、勉強の合間の気分転換にお茶を飲んでいると「あんたがこうしてお茶を飲んでいる間にも他の人は勉強しているのよ。さあ、早く勉強しなさい」と母親に言われ、一瞬どうしてそんなことを言われたのか理解できなかったD子。いずれの親にも共通するのは、子どもの状況を理解せずに表面の行動だけを見、自分の不安とイライラに任せて子どもを急き立てている姿である。このようなとき子どもたちはムカつく。言い換えれば、それはすでに疲れている子どもたちが疲れているがゆえに自分なりに工夫した一時の休息を取っているのに、その状況を理解しようともせず一方的な圧力を与えたときである。子どもたちは、やる気が出てくるのを待っていてほしいと願っている。しかし、親は待っていてやる気が出てくるとは思えない。もしかしたらそれは本当かもしれない。それを子どもの責任であると突き放すことができないのが親の最も辛いところではある。親子の対話が大事とは言っても、「待っていてあんたが勉強し出すとは思えんよ」「そんな気持ちで待っているからこっちもやる気が出んよ」、こんなやりとりが延々と続くのが落ちである。この親と子の堂々めぐりが少しでも解消されるには、親が子どもを所有しようとしないうこと、心のどこかで子どもを自分とは別の人間と認め、子どもがやろうとしていることに責任をもって取り組ませてやること以外にはない。

そのような厳しさ、すなわち親の側の「自立」こそが今問われはじめている。

また、E子によって、大人たちがあたかも自分たちの価値判断を正しいことと思って自分たちに押しつけてくる時のムカつきが語られている。「大人たちは正しいとか間違っているとかいう言葉をあまりにも簡単に使い過ぎる。その根拠は何なのか示してほしい」こんな声が聞こえてくる。この場合のムカつきは、理由が納得できないのに、それを正しいこととして押しつけてくる大人たちに対する正当な反論である。子どもから「おまえがそのことを正しいと言っている根拠を言え」と言われたら、おそらくほとんどの大人は何も言えないか、大した理由は示せないだろう。加えて、E子の訴えの中には、大人は言っていることとやっていることが違う存在だという異議申立てが含まれている。このことは、A男の発言にも示されている。子どもは模倣する存在である。大人自身ができていることを子どもにだけさせることなどそもそもできない。このような子どもの問いに立ち向かえるには、大人は実践的な裏打ちのある哲学者にならなければならない。それができないから、対話を拒み一方的に価値を押しつけるしかないのである。当面、今のE子に必要なのは、自分の考えにしっかり耳を傾けてくれる大人である。すべての大人に期待することはできないとしても、まずはこのタイプの子どもの得意とする大人——既存の価値をカッコにくくり、何が正しいのかや当面どう生きていけばよいのかを一緒に考えてくれる大人が対応するのが有効である。そして将来的には、哲学者タイプの大人だけでなく、いろいろな考え方を持つ大人たちと対等な対話ができる体験を積んでいけるとよいだろう。

(2) 教師たちへのムカつき

キレる前にどうして言葉で言えないのか、今の先生たちに言いたいことはないかという問いかけに対して、生徒たちは「先生も忙しそう。生徒にもあまり期待してないんじゃないか」「内申書のことが気になって言いたいことが言えない」「先生たちは冷めている」などと発言している。しかし、現場の教師たちは、最近の生徒たちは教師に向かってこなくなつたと感じている。これについては、3.(1)の④においてすでに示された現代の若者の「やさしさ」という観点からの考察が可能であろう。また、内申書の扱いは、学校側の管理体制が保護者側のエゴイズムによって露になる領域であり、多くの場合保護者が過敏になることに煽られる形で生徒も敏感になりがちである。そして、そこから学校への不信感が生まれやすい。しかし、学校側の話聞いてみると、少なくとも山口県においては中学校・高校ともに、内申書（特に以前話題となった生活態度等の点数化）が持つ実際の効力をさほど重要視しているとは思えない。これは、むしろ保護者の方が学校の受験管理に敏感になり、それに子どもたちが便乗し自己主張するという架空の議論が生起しているようにさえ思われる。現場で子どもたちを扱う教師たちの多くは、最近の生徒は親から甘やかされて育ち、自己主張はするが「幼稚」になつたと感じている。しかし、仮に子どもの「人権」あるいは「個性の尊重」という言葉が流布する時代の中で、あるいは学びの主体は子どもたちであるという言葉の前に、教師が率直な自己表現を差し控えるようになるとしたら、これはそのまま人間的なかわりのさらなる希薄化を招くことになるだろう。

このように考えると、生徒の「先生たちは冷めている」という言葉は、生徒の内面の教師への投影であると同時に教師の内面の生徒への逆の投影と相互作用を起こしており、結果的に、教師も生徒もお互いに相手を牽制し合い、受け身的であり、その分お互い傷つきやすくなってきたと言えるのではないだろうか。もしそうだとすれば、教師と生徒の関係

の密度は先に指摘された風潮と相まって、表面的にはそうでないとしても実質的にはますます希薄になっていく可能性をはらんでいると言わなければならない。今本当に必要なのは、生徒が起こす様々な問題の後を追う形で、子どもとのかかわりに関する技術的な研修を積んだり校内での対策を組織的・制度的に導入することではなく、むしろ教師の一人一人が教師本来の姿の「原点」に立ち帰ることではないだろうか。教師の原点とは、一人一人の子どもと一対一で向き合い、時にやさしく受けとめ時に厳しく叱るというかかわりを持つことにはじまる。そして、このような教師の地道な努力こそは、報告書という形に残るものではなく生徒の心に残っていくものである。もちろん、この提言自体がまたひとつのイデオロギーとして一人歩きしては何にもならないが。

以上述べられたような注釈はあり得るとしても、生徒たちの言い分の全体の印象としては、「お互いが自己主張できる関係がほしい」という発言に代表されるように、中学生をもっと大人として扱った方がよいのではないかとの感をやはり否定できない。もっと自己責任性を育てることを前提にした自治的活動を重視していく。つまり、大人の側はもう少し子どものことを信頼し任せてみる。任せてもらった子どもは大人の信頼に応える、という大人と子どもの新しい相互作用。このような試行錯誤が許される空間としての学校でありたい。しかし、教師は依然として、子どもたちを放っておくと何をするかわからない未熟な存在として信じることができず、監視し管理し支配する「教師モード」を崩さずに生徒と接し続ける。中には、「悪いことをしたと一方的に決めつけられた」「精一杯なのにできないと文句を言われた」「頑張っただけなのに『まぐれだ』と言われた」「はじめから疑ってかかる」など心ない言葉で生徒の心を傷つけてしまう教師もいる。人間同士のかかわりの中で、このような傷つきをゼロにすることはそもそも不可能であるとしても、生徒が本当に傷ついていることがあるのだという事実を謙虚に受け止める態度は教師には是非とも必要である。すなわち、教師という権威を借りて、自分たちは変わらずに子どもだけを変えようとする。ある一定の生き方を押しつけようとする。このような教師の態度に大人たちの代表を見、また将来の自分自身をも垣間見るとき、子どもたちはムカつき、キレるのではないだろうか。

(3) 親たちへのムカつき

親子の対話が必要と言われて久しいにもかかわらず、親子関係の現状は依然として人間としての対等な関係性を構築できてはいない。親は建前ではどんなに綺麗事を言っている、わが子の受験に際しては己のエゴイズムをむき出しにしているように思われる。例えば、ゆっくりお茶を飲んでいるところに勉強しなさいと言ってくる行為は、親という存在が子どもにとってくつろぎを与えるどころか、自分の気持ちをわかろうともせず一方的にプレッシャーを与えてくる存在であることをよく映し出している。そして、子どもたちが求める親のあり方としては、子どものやる気を待ってくれる、すなわち、ある程度の自由を認め、「適度な」期待をかけてくれる存在であってほしいという声が上がっている。言葉だけを見ると、子どもの方がずっと大人である。

一方、親たちは子どもたちに日頃「何かあったときは親に相談しなさい」などと言っておきながら、実際相談してみたら、「そんなことは自分で考えなさいと言われた」という指摘もある。さらに、E子のように人生の価値観の根本を問題にしようとする子どもに対して、親はその理解者あるいは援助者であるどころか、「そんなこと考える暇があったら

勉強しなさい」というメッセージを放つ。これらの振る舞いは子どもに二重拘束的な葛藤と失望を与え、時として暴力的である。思春期の揺れる心に寄り添うとは、E子自身が訴えるように、その子の考えていることにしっかり耳を傾け、語る主体性を育ててやることではなかったろうか。もちろん、必ず親がこの役割を担わなければならないわけではないが、少なくとも「ごめんね、お母さんにはようわからんから、他の人を探してみるね」くらいのことは言えるはずである。また、このような子どもによる異議申し立てに耳を傾けていくことは、ちょうど思春期にあるわが子を育てる中年期の親自身の精神的危機と重なることが予想されるが、うまく行けば子どもの心の揺れに向き合うことで、それに導かれつつ親の方が自分の問題を乗り越えていくのに役立つかもしれない。

そもそも子育ての原点とは、「あなたがただ元気に生きて成長していってくれるのが楽しみ」というものではなかったろうか。それは、子どもの存在そのものを無条件に肯定し慈しむまなざしである。ところが、夫の協力も得られず育児の忙しさに追われているうちに、いつしか大事な子育ての原点から遠く離れ、願わくばよりいい成績、よりいい高校、いい大学、いい仕事へとわが子を駆り立てる母親になっていく。このような付加価値を母親が子どもに求めはじめる理由は、現代の子育てが母親の人生のいくばくかを犠牲にしなければ成り立たないという構造的な問題を含んでいるからだけではない。今回のフォーラムでは子どもを勉強へと追い立てる親の多くが、たまたま母親であったにすぎない。「おまえのため」と称して、子どもの人生にいちいち口を出し、子どもの主体性を奪い続ける父親が世間にはかなりいる。すなわち、この問題の背後には、わが子が自分の思う通りに生きてくれることを願う親の「欲望」の問題が控えている。子育ては親の欲望と子の欲望のせめぎあいのプロセスであり、それゆえに、親子関係の問題は、社会や家族の構造を少し変えたくらいでは及ぶもつかないほど厄介なことが多い。「あんたのため」といくら綺麗事を並べたとしても、子どもにとって自分たちを所有物のように扱う親は、やはりエゴイストである。まず、親は自分の「欲望」に気づかなければなるまい。そして、子どもにそれを自分のエゴイズムとして伝えていく謙虚さが要る。後は、それに子どもがどう対処していくかということであり、その対処の仕方は親子関係の数だけあるだろう。すなわち、親は自分の考えや意見を子どもに提示し、時にぶつかり合うことが必要である。そして、そのうえで子どもがどのような人生の選択をしても、最後のところで「まあ、仕方ないな」と自分に諦めがつけられる親であること。これらは、時代を問わず親が親であるための基本的要件である。

また、今回の中学生の声からは、親の方が学校以上に子どもたちを勉強に追い立てている姿がはっきりと見て取れる。学校がむしろ親たちの受験競争意識に押されているといった様相を呈している。今や学校に行き、いい会社に勤めることが、その子の人生の幸せを保証するとは限らないにもかかわらずである。むしろ、この世の中で言われる出世と個人の幸福とは必ずしも同じでないことを豊かに語る親が、もう少しくらいいても悪くないはずである。

親の「欲望」の問題がおそらく最も複雑化するのには、子どもたちに対して一定の価値のプレッシャーを与え続ける親に対して、本当は無理をしているにもかかわらずそのことに気づくことなく、したがって反抗することなくその期待に応えてきた子どもたちによってである。本当は無理を感じていながら相手の期待に沿おうとする生き方は、一種のニヒリズムである。しかし、子どもにとって親から愛されないことは自分の存在価値を見失うほど

重大なことである。子どもははじめから弱い立場に置かれている。このようないわゆる「よい子」たちは親に直接反発し、時に恨むことができないことで苦しみ、間接的に、すなわち自己破壊的な症状や問題行動を現すことで親や周囲の者たちを自分の苦しみに巻き込もうとする。最終的には、親そして誰よりも本人が、このような支配・被支配のゲームが結局は何も生産的なものをもたらさないことを頭ではなく身にしみてわかるための「時間」が必要である。

いずれにせよ、親たちはまず自分たちの支配の欲望に気づき、それと向き合うことから始めなければならないだろう。それはあらゆる大人の合理化を退け、自分自身のどうしようもなさ直面していく勇気を必要とする行為である。子どもたちの声に本気で耳を傾けるとは、そのような不安定に自分自身をさらすことを意味する。大人がそれを拒否しようがしまいが、子どもたちは、安定を捨てて自分たちの問いの地平に降りてきてくれる大人たちを求めている。その願いがかなえられずいつまでも据え置かれ、加えて一方的な言葉の暴力で追い詰められるとき、時に「やさしい」彼らはムカつきキレて、結果的に自己を主張することになるであろう。

<注>

1. 「ムカつく」「キレル」は、最近の子どもたちが、特に中学生を中心に日常的に用いている言葉である。齋藤（1998）によれば、ムカつくは、軽い口癖のレベルから重い本気のものまで使用範囲は広く、「瞬間的に沸き上がる、やり場のない怒り」を感じたときの表出言語であり、キレルは「内部にこもっているムカツキ用の小さな器からムカツキという水があふれて、感情が決壊する状態」を意味するという。子どもたちによって、これほど頻繁に使われながら、正確な言葉の定義をいまだ持ち合わせていないのは、この言葉が多分に感覚的に用いられていることにその一因があるように思われる。

<付記>

最後になりましたが、わたくしのために貴重な体験を語り、考えるヒントを与えてくれた中学生のみなさん、ありがとうございました。また、大学人としても臨床家としてもまだまだ未熟者のわたくしに、このような場を与えてくださった国立徳地少年自然の家および長門市教育委員会のスタッフの方々に、お礼申し上げます。そして、本論文をまとめるにあたり、現場教師の観点から貴重なコメントをくださった防府市教育委員会指導主事の石丸義臣氏に深く感謝いたします。

文献

- 大平 健（1995） やさしさの精神病理。 岩波新書。
大石英史（1998） 緊急ミーティング報告書。 国立山口徳地少年自然の家。
大石英史（1998） キレル子どもの心理的メカニズムに関する一考察。 山口大学教育学部研究論叢，第48巻第3部。
齋藤 孝（1998） 「ムカツク」構造。 世織書房。